

名古屋大学名誉教授
名古屋産業科学研究所上席研究員

三矢 保永

昭和 41 年卒業(第 25 回)



分水嶺を越えて

1. はじめに

定年まで勤めて退職することは、人生行路の分水嶺を越えたことを意味する。定年時の最終講義の締めくくりで、「分水嶺に至るまでに社会から授かり蓄えることができたポテンシャル（位置エネルギー）を、分水嶺を越えて下りながらはき出していくなかで、社会に恩返ししていればできればいいなあ」という趣旨を話した記憶がある。社会への恩返しとは、見返りをとまわらないボランティア活動であり、ひとつは大学で従事してきた専門分野でできること、もうひとつは専門分野から離れてもできることを挙げておいた。それから。もはや十年が経過してしまった。本稿の執筆の機会に振り返ってみると、自画自賛の分を割り引いても、おおむねこの道筋からかけ離れてはいなかったと思えるのは幸いなことである。

2. 翻訳ボランティア

専門分野については、名古屋産業科学研究所に新たに研究部が発足し、上席研究員として研究を継続できる環境が得られたことが幸運であった。分水嶺を越えた先生方に活躍の場を提供するために、発足に尽力された名大名誉教授 H 先生の指導力なくしてはありえなかった。本文の内容とは関係しないが、記憶にとどめておきたい。

現役中には、専門分野の学会に多大にお世話になってきたので、なにかお返しできるものはないか、と思いついたが、専門書の翻訳出版である。東工大名誉教授 O 先生との共訳で、翻訳作業に取りかかってからまるまる 3 年をかけて、2013 年末にやっと完成した。なんとか、2 刷りになるまでには売れてはいるようではあるが、印税収入どころではなく、出版経費は持ち出しのままで、3 年間の労力

はまさにボランティアとなっている。関心のあるかたは、ぜひ「マイクロ・ナノスケールのトライボロジー、吉岡書店」を購入して、赤字分の補填にご支援いただければ幸いである。(趣旨を理解して出版に応じていただいた吉岡書店の支援なくしてはありえなかった。古い文化を大切に残す京都ならではの出版社であり、ずっと残ってほしいと願っている。)

3. 博物館との関わり

私にとっては、専門分野以外の活動のほうに、より充実感を覚えている。主には名大博物館を通じてのボランティアであるが、このような機会に恵まれたことは、偶然というか必然というか、そういう運命にあったとしか思われぬ。きっかけは、2013年に名大博物館野外観察園で写真展「空 雲 光」を開催していただいたことである。このときの来場者数は、某新聞社のイベント案内に3週間にわたって掲載されたこともあって、観察園イベントの来場者数の最大記録になっているとか。これが機縁となって博物館友の会に写真サークルが設けられ、現在は分不相応なことにも講師役を引き受けている。関心のあるかたは、名大博物館友の会に入会していただき、ついでに写真サークルにも、エントリーしていただきたい。その他にも、博物館にある学術上貴重な収蔵品をデジタルアーカイブス化するための写真撮影や、前穂高岳におけるナイロンザイル事故に関連するイベントの講師(ながら山登りの楽しみ方 一雲を読む、風を読む、光を読む)などで登場する機会をいただけてきた。

4. 山の贈りもの

ボランティア活動の多くは、元をたどってみれば、私の道楽である山登りから得られたものが機縁になっている。これを「山からの贈りもの=山の贈りもの」ということにしよう。そもそも、名大博物館とのつながりができたのも、山の贈りものである。名古屋大学に職を得たあと、49才にして山登りを再開した。最初のうちは家族と一緒に、家族が着いてこなくなると、学生達や事務の方々を巻き込んで山の会を結成して、青春時代のごとく山登りを楽しんでいた。当時の大学キャンパスには、まだ牧歌的な雰囲気が残っていた。この会の主要メンバーが博物館に異動したことで、博物館とのつながりができたのである。



定年後には時間の余裕ができたので、ゆとりをもって山登りを続けているが、登山スタイルは変わった。天気を読んで前日に登山口に入り、そこでテントを張って一夜を過ごし、翌日早朝から登り始めることが多くなった。当然単独行が多くなり、沈思黙考している期間が長いのである。自然の中にどっぷりと浸かっているスタイルは、串田孫一風の哲学型登山のようにも受け取られかねないが、とくにストックになにかについて考え込んでいるわけでもない。テント場では、耳に入るせせらぎの音や鳥の声を聴き、眼に入る山の彩り、雲と空の変化を見て、ただぼんやりしているだけで、時間が過ぎていく。登山中は、危険箇所や分岐点、あるいは撮影ポイントでもなければ、足下に目配りしながらも黙々と足を運んでいるだけである。

◆
これまで数多くの山に登ってきた。若い頃には、山道具に加えて当時の重いスキーまで背負って、あちこちの山で春山スキーを楽しんでいたし、ワンゲル風にテントと自炊用品を背負っての長い縦走も、楽しさのほうが優っていた。若いときから一貫しているのは、なにかの目的のためではなく、ただ自分のためだけに登っていることである。実利もなく無目的的にエネルギーを消費しているじつに自分勝手な行為なのである。

◆
「日本百名山」の著者深田久弥は、本書のあとがきによれば、少なくとも1000以上の山に登っていることになる。今西錦司は3000の山に登ったと、なにかの本に書いてあった。冒険的な登山家でもなく、競争的な登山家でもなく、たかが一介の大衆登山者にすぎない私の場合には、公言するほどの価値もないが、これまでに登った山の数は、通過点にすぎないようなマイナーな山まで含めてやっと数百ぐらいにすぎない。それでも、じつに多くの贈りものを山からもらった。汗をかいた分だけ得られる充実感、山頂からの大展望や空・雲の変化を眺める爽快感、疲労困憊や危機一髪を乗り越えた達成感などの実体験が、撮影した写真や行程記録などととも、この歳で社会に恩返しできる原動力となっている。自分勝手にやってきたことで、社会に恩返しできる機会が得られるとは、なんともありがたいことである。

◆
道楽という言葉には、マイナスのイメージが先行しているが、仏教用語で「仏道修行によって得た悟りの楽しみ」を意味する。信仰心に厚いわけでもなく、仏道修行の経験もないので、「悟りの楽しみ」がどのようなものなのか実感できないが、悟りに至るとなにか楽しみがあるようである。山中でたまにお目にかかる山伏（修験者）は、密教でいう山岳修行者であり、深山幽谷に入って修行を行うことが、悟りの境地に近づく手段とされている。非日常的な深山幽谷に入ること、あえて危険を承知で重労働に耐えるということでは、大衆登山と類似している。違いは「悟りを得ようという」目的があるかないか、いや目的意識をもつかもたないか、という点だけにあるようにも思われる。若い頃には全く思いつかないことではあったが、山登り（大衆登山）の楽しみは、「悟り」の一端に触れることではないか、と思えるようになった。同じ趣旨の解説が天台寺門宗のウェブサイトに掲載されているので下記に引用しておこう。」

「現代にあっても山に登って、きれいな大気を呼吸し、身心を鍛えることは、何より大切なことです。自然と一体となること、ひたすら山に登り、自らを大自然の懐にたくし、山に生きる動物や虫、樹木や草花にいたるまで生きとし生けるものすべてが、一つの生命であることを実感することができれば、それがそのまま修験道が目指す「即身成仏」の悟りの境地に近づいたことになるのです。」

出典 <http://www.tendai-jimon.jp/trainee/index.html>

◆
このような日本人に特有の自然観は、日本の豊穡な自然や振幅の大きい季節変化のなかで生活してきた日本人の祖先たちが、何代にもわたって直接体感するこ

とによって培われてきた。しかし、高度成長期を経て、グローバル化の進展や、SNS の普及によって、そのような機会が失われ、また自然観も変貌しつつあるように思われる。時代の流れに抗うことができないが、一時でも、自然にどっぷりと浸かって頭を空っぽにしてみることは、グローバル化や SNS 社会の普及とともに、生き物としての人間性が希薄化しているなかで、自然のなかで生きる生き物としての人間性を見つめ直すよい機会を与えてくれるはずである。

5. おわりに

古希を過ぎ分水嶺からずいぶんと下りてきて、もはや終着点が見え始めていることもたしかである。最近では、どの山に行っても、その場の最高齢者になってしまう。最高齢者といっても、ダントツの場合が多い。「そんなお歳で」と心配されるよりも、「こんな歳の人でも」という安心感を与えるようである。余談になってしまうが、私の出身地の図書館祭りで「工学者が読み解く万葉の空と雲」という講演を行う機会があった。この講演に遙かに遠い茨城県北部から、山ガール 1 名が、深夜運転で駆けつけてくれた。図書館の担当者も驚いたが私の驚喜も並大抵ではなかった。目立たない私にはそんな引力があるはずもないので、私の山への向かい方に安心感を覚えて、それが引力になったのかもしれない。

今や、私にとっては山登りが「生きている証」にもなっているが、体力的に止めなくてはならなくなるのも、そう遠くではない。しかし、山の贈りものは、私の体の中に存在し続けることはまちがいない。多くの大衆登山者も同じ贈りものを山からもらっているはずだが、それが「悟りの楽しみ」と気づくのは、たぶん、分水嶺を越えて終着点が見え始めてからになるだろう。